

平成 2 8 年第 3 回  
上小阿仁村議会定例会  
会 議 録

平成 2 8 年 9 月 5 日 (開会)

平成 2 8 年 9 月 1 5 日 (閉会)

○議長（小林信） 次に伊藤敏夫君の発言を許します。2番、伊藤敏夫君。

（2番 伊藤敏夫議員 一般質問席登壇）

○2番（伊藤敏夫） 私は、質問に入る前に、若干、台風10号の件について申し上げたいと思います。

先般、8月30日の台風10号は、当初、秋田県北の進路予測でありましたが、予定時刻には進路がずれまして、県内では殆ど被害がなく幸いであったことでもあります。ですが、地域温暖化で世界的に異常気象の影響は、今後、経験したことのない災害に見舞われる可能性は大きくなっているという報道でございます。

台風10号の被害は岩手県、北海道に甚大な被害をもたらし、犠牲者も多く、今でも発見されていない不明者がいると報道されています。孤立している集落もあるようでございます。

被災地の皆様に、お見舞いを申し上げますと共に、被害の早期復旧をお祈り申し上げます次第でございます。

それでは一般質問に入らせていただきます。

1つ目、雇用の場、誘致活動の推進について、村内には公共以外の民間企業として、私の知る所では12カ所の働く場があると認識しております。

規模的には10人以上の職場は7カ所のようにございます。村はどのように認識しているのでしょうか。

村外の職場に通勤している方が多いと思いますが、村から通って働く理由は、それぞれ異なると思いますが、自分に適した職場が村内に無いからでもありましょう。また、働く方々は、子育て、学校、両親、地域性を思うと村内で働きたいが、村内企業からの募集も少ない中、希望できる職場がないといった声も聴いております。

村は近々、「山林活用で雇用に向けた事業展開を推進する」としているが、村の現状を踏まえれば、山林関係雇用のみならず、小規模企業も推進するべきと思うが、村長は、このような村の現状と、今後の働く場について、どのように考えておられるのか、お答えいただきたいと思います。

○議長（小林信） 答弁を許します。村長、小林悦次君。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 雇用の場の誘致活動の推進についてというふうなことであります。

上小阿仁村につきましては、これまで多くの方が山の仕事に関わってきた歴史があります。たくさんの方が関わって山林を大切にしてきました。ですから、これを何とか復活できないかというふうなことを考えております。

来年度中には、村が経営する約2,000haの村有林、そのうち1,500haが杉という状況でありますので、この村の村有林の経営計画を策定すると、新たな計画

を作成させていただきたいというふうに考えております。

この計画の中で、例えば、毎年15haを伐採し、植栽するサイクルを基本にして、植栽後の下刈、除伐、間伐の仕事を安定的に生み出す100年計画を検討するものであります。

これによって、毎年、15haの植林があつて、15haの草刈りがあつて、15haの除伐があつて、間伐、皆伐が毎年、毎年増えていくというふうな状況になります。

その仕事量というのは大変なものになると思っております。

ただ、残念なことに現時点で、木材単価が安いので、これになかなか手を付けられないというふうな状況にあります。ですけれども、例えば、直径28cmの丸太については、ボリューム単価が一番高いと状況にありますので、これらを少し軸にして、専門家を交えながら計画を策定できないでしょうかというふうなことで、今考えております。

これまで、間伐しても収入間伐というふうなことで対応しましても、いわゆるお金にならない木は山に捨ててくるわけです。例えば、曲がって製品にならないというふうなものは山に捨てられるというふうな状況にありますので、この山に捨てられていた間伐材等については、先ほどの少しお話したバイオマスイエネルギーへの活用を、この計画書の中に盛り込んで行く。このために、どうしても事業費を軽減する必要がありますので、林道網の整備や民有林についても、皆伐と植林を、これはあくまでも山の木を切ったら何としても植林をしないと、山は荒れていきます。やはり、皆伐と、伐採と植林をセットにした形での補助事業の対応を進めて行くというふうなことを考えております。

ですから、100年後には、毎年、100年生の杉を生産することができるようになるというふうに思っております。そして、この事業が毎年コンスタントに行うことができたとするならば雇用が拡大し、昔の林業の上小阿仁が復活するというふうなことになると思っております。

無いものからあるものを作るというのは、なかなか難しいわけですが、今現時点で、上小阿仁村には村有林が2,000haあつて、そこにチャンと木が植えられているわけです。そして、先人がこれまで大変な手入れをしてきて、立派な木があるわけですので、これを何とかして活用するような計画を作らせていただきたいというふうに思っております。

また、東京オリンピックの関係もあつたのですが、村では、森林認証制度を進めております。これについては、この秋までには何とかして取得したいということで今進めております。

先ほども少し触れましたが、バイオマスイエネルギーの活用ということで公共施設のエネルギー転換が進むことで、木材に関する仕事が増えて雇用環境も改

善されるものと思っております。

来年度、建設予定の集住型宿泊交流施設の機能として企業向けのレンタルルームの整備を予定しております。

厳しい経済状況の中、企業誘致そのものが難しい時代となっておりますけれども、村で整備しました光ファイバーを活用したテレワーク事業なども視野に入れまして引き続き誘致活動をしていきたいと考えております。

議員が言われるように、なかなか働きたい人が働きたい仕事に就けないというふうな状況にありますけれども、できるだけ、働きたい人が、理想的な仕事に就けるように、いろんな形で誘致をしてくると、いろんな形でいろんな仕事が、雇用が増えるように対応させていただきたいというふうに思っております。以上であります。

○議長（小林信） 2番、伊藤敏夫君。

○2番（伊藤敏夫） ただ今、村長の考えを聞かせいただきましたが、ただ、木材関係の雇用の場も増えて、改善になるというように、私は受け止めたわけがありますが、そうすると、木材関連だけの仕事で雇用環境が改善できるというものではないというふうに思っておるところでございます。

なぜかと言いますと、そこに男性が何人ぐらい、何%ぐらいになるのか、或いは女性の働くところが何%ぐらいなのかいうところも、やはりある程度精査していかなければならないものではないかなというふうに考えました。

私は、大きい企業誘致というのは、この村には、交通の便とか、そういう条件の設定というものがあるわけでありますから、なかなかそれは難しいものだと、ですから、先ほど質問したのは、小規模でもいいのだと、5人とか10人の働く場というものを必要でないかというようなものを質問しているわけございまして、今の村長の答弁を聞きますと、木材関連の雇用が増えて、働く場所が完璧になるように、私は聞き取れましたので、そういうものだけではなくて、2年前の関東上小阿仁会の時も、私はその前に一般質問しまして、ぜひ、議会の皆さんにも入っていただきながら、その上小阿仁から出身された事業主もおると思いますから、そういうようなものをお願いするべきではないかというような話もしたのですが、なかなかそれもままならぬ状態で実施されないままであります。

話によりますと、議員の中の皆さんにも同級生或いは知人が事業をやっておられて、本当にやる気があるのであれば、投資もしたいというような話もあるように聞いておりますから、そういういろんな人の関係も築き上げながら、村の雇用というものをもっともっと進めていただいてもいいのではないかとこのように、私は思っておるものでございます。

確かに、木材関連でどのぐらいものが云々というのが、今、村長が言ったよ

うな考えと、私どもが考えているものとは、当然、違いはあるとは思いますが、けれども、ぜひ、そういう意味での小規模の工場の誘致というものが必要でしょう、ということをお願いいたさせていただきます。

例えば、上小阿仁には引きこもりの人間がかなりおるようでございます。これはまだ私も調査はしておりませんが、そういう人とか或いは生保を受けている皆さんも結構おられると思うのです。そういう方々も働いて村に納税できるような体制づくりというものも必要ではないかということをお願いいたさせていただきます。それ以外に働く場があれば、また、東京或いは中央の方から上小阿仁へ帰ってきまして、それなりに高い給与をもらえなくても、退職された方については、その場で働くと、そういう人方が全部木材関係にだけ働けるかということ、そういうものではないと思っております。

そういう意味と、もうひとつ、集落内を見渡しても若い人が段々少なくなってきた実態でございます。本当にこのあと、集落を運営できるものかというようなものも、村を、集落をまとめる人がいなくなったなど、働く場もないからでもありましようけれども、そういう点をもう少し、こと細かく考え合わせながら村の政策というものを立てていただければありがたいのではないかなというふうに思っておりますし、そういう意味でのものについては、全然、村長は木材一本で進んで大丈夫だという考えなのか、そこらへん、もうチョッと噛み砕いて説明していただければ、大変ありがたいと思いますが、如何でしょうか。

○議長（小林信） はい村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 最初に、小規模企業の関係でありますけれども、これにつきましても、先ほど少しお話したとおり、集住型交流施設の中にレンタルルーム等も設けます。それを貸し出ししながら対応したい、そして、光ファイバーが全村に整備されておりますので、これを活用する。他の町村にはないわけですので、これを何とか活用する。

生活環境としてはどこにも負けない、都会で生活していることが、本当に可哀想だというふうに思っております。この環境の良いところで、人間らしく、そして好きな仕事をしながら生活をするというふうなことが、一番理想的であるというふうに思っております。

それから、引きこもりと生活保護者の関係になりますけれども、村内の企業の代表の方々と少しお話をする機会があるのですけれども、その方々は働いてもらいたいと、一生懸命働いてもらいたい。いわゆる職場は、雇用はしているのです。募集はかけている。でも、来ていただけない。最終的に村内の人に来ていただけないものですから、村外から通勤をしていただいているというふう

なことを、よく言われます。ですから、できれば村内の企業に村内の人が働いていただけるということになればと思っております。

そういう意味で、最近、例えばUターンされた方でも、自宅でパソコン操作で、いろんな仕事をされておられる方もおります。都会の方の中には、若い人方の中には、年間200万円以下で生活しているのだそうです。ですから、都会での特殊出生率が悪いと、東京あたりが一番悪いわけですから、ですから、地方創生事業の中で、地方で生活していただくために、地方がどのようにすれば、地方に若い人方がたくさん集まるのかと、地方で若い人が生活しやすいような環境整備をするのだというふうなことで、今回の計画がありますので、そういうことを進めていきたい。

そのためにも、今回、高校、大学に入った方々にお金を借りた場合、村で生活をしていただければ、高校の場合は無償にしてある訳です。そうすると東京で生活すると、その償還、返還金は莫大なお金になります。それを東京の生活しにくい所で、生活をしながらお金を返していかなければいけない。上小阿仁に来れば無償になる。それを免除するわけですから少しくらい収入が減ったとしても、その分良い生活ができるのではないかというふうなことで、できるだけ若い人方が生活しやすいような環境整備をしていくということで、今後とも、皆さん方にご相談をしながら、いろんな施策を講じていきたいというふうに思っておりますので、林業一本で生活ができるということは考えておりません。

ただ、林業関連事業で、例えば、バイオマス事業でチップ工場ができたり、そうしたらバイオマス発電機が作られたり、いろんな関連事業が増えていきます。そうすると製材も増えていく、いろんな形で関連事業が増えていきますので、少し核になるものをまず進めさせていただきたい。それは林業だけではなくて、農業の部分、先ほどの観光農業も含めて、いろんな形で農業がしやすいような環境整備をするというふうなことによって雇用がドンドン増えていく、6次化産業につながっていくということで、村を活性化させていきたいと思っておりますので、どうか、皆さん方のご指導をよろしくお願いしたいと思っております。

○議長（小林信） 伊藤敏夫君。

○2番（伊藤敏夫） 木材関連でもいろんな仕事が増えてくるのだというようなこともあると思います。当然だと思いますが、ぜひ、退職された方、或いは職につきたくても、なかなかそこにまで到達できないような人方を、できるだけ雇用して村の活性化につなげていただきたいというふうに思っております。

1番の方については以上でございまして、2番の方に入らせていただきます。武蔵大学との交流継続についてでございます。

前地域おこし協力隊の努力があって、3年前から実施してきた武蔵大学生と村民との交流は、地域から大変喜ばれている実情でございました。

学生は自費を負担して、今年まで述べ145名が来村し、これからも来るよう  
ございまして、含めて145名が来村するというような形になっているようござ  
います。

武蔵野大学では来村希望者が多く、選考されての指名者であると前の協力隊  
員から聞くことができました。145名が村で生活し、一部分ではありますが、地  
域の皆さんと交流を深めていることは、今後、様々な効果につながっていくも  
のと思われまます。

そういう意味で、今まで来村されて来ている大学生と村民との交流について、  
結果について、問題点等については。どのように考えておられるのか、或いは  
聞いておられるのか。経費面や村民の協力体制に要望等があるのか、否か。そ  
れから「KAMIプロ・リスタ」との関連については、どのように今後進めていく  
のか。そういう点も含めて、村長のお考えをお尋ねいたします。

○議長（小林信） 村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 武蔵野大学生との交流継続についてというふうなことで  
あります。

今まで来村されて、村民と交流されての問題点、というふうなことで、一番  
最初に思い当たるのが、個人で受け入れをしてくださる方、大学生を泊めてい  
ただけの方が少ないというふうなことであります。そう意味で、個人で受入を  
してくださるご家庭、集落で受け入れしてくださっているご家庭、本当に有り  
難く思っております。

この武蔵野大学フィールドスタディプログラムというのは、自ら課題を設定  
し、自ら答えを導き出し、解決に向け果敢に行動する人材を目指しておりまし  
て、行く行くは大学の知的資産の提供をいただきながら、産学連携を目標とし  
ております。

滞在の日程につきましては、2泊の民泊が組まれているため、これまでも広報、  
チラシ等で受け入れ家庭を募集し対応しておりますけれども、応募してくださ  
るご家庭が少なく、最終的には個別にお願いをして、お引き受けをしていた  
だくケースが殆どでありまして、今後も民泊先確保が課題になるというふう  
に思っております。

学生は最終日に、班ごとに体験発表をしております。都会では決して体験で  
きない田舎の良さ、受入家庭との思い出などを発表する学生もおられます。中  
には涙を流しながら、本当に感激をしながら発表してくださる学生もおられま  
す。

それと合わせて冬季期間、個人的に裸参りや万灯火に参加をしていただける  
のも、上小阿仁村の良い体験をしたからだと思っております。

今後も引き続き実施ができればと考えております。

次に経費面や村民の協力体制に要望というふうなことだと思います。

学生の受入れにあたりましては、大学側と何度も入念な調整をしておりますが、大学側からは、できるだけ学生の力でスケジュール調整して現地入りするよう指導していただいております。

ここに来るまでの旅費もすべて学生の自己負担というふうなことになっております。

大切なお金を自分で管理しながら、滞在生活することも学びの一つとなっております。

村からは旅費の一部を助成しております。また民泊先には、学生の食材代というふうなこととして1日1,800円を民泊先に支払いをしております。大学からは上小阿仁村事業への参加学生が非常に多いということですので、今後は受入先となる民泊先を組織化して、学生の受入に対応できる体制ができないか検討してまいりたいと思っております。

「KAMIKOANIプロ・リスタ」との関連についてということであります。上小阿仁村を知っていただくために、村の歴史、産業、文化も学んでいただいております。

kAMIKOANIプロ・リスタは、地域活性化事業であり、大学生の受入時期と重なることから、イベントの準備、運営にも尽力していただいております。

学生達が情報発信するSNS、上小阿仁村活性化支援プロジェクトフェスブックがあるのですが、この段階で、活動の様子をリアルタイムで発信をいただいております。

上小阿仁の大学生の応募は、本当にたくさんおられまして、倍率が大変高いようであります。ですから、選ばれた人が上小阿仁村に来ているというふうな状況であります。応募の内容を少し見させていただくと、やはり現代アートへの感心も応募の中に書かれております。そして、自然環境の良さ、農業、林業への感心、そういう方、それから高齢化についても少し書いておられる方もおられます。いわゆるそういう高齢化でどういうふうな生活を、どういうふうな施策を進めているのかというふうなこと等を、いろんな形で興味を持たれて来られています。

ですから、それぞれ皆違う認識で上小阿仁村にお出でをいただきながら、いろんな形で体験をして、いろんな形で勉強をして行っているということ、そして、中には上小阿仁に来て住みたいという人もおられました。本当か、嘘かということを書いてしまうとあれですけども、ただ、真面目に言ってくれましたので、やはり相当刺激を受けておられる。上小阿仁の印象が大変良かったのではないかなというふうに思っておりますので、そういう意味では移住、定住



にもつながってくるのかなと、そして先ほどお話したように、各種イベントにも、個人負担で来るというふうなことがありますので、いろんな形で良い効果が現われているというふうに思っておりますので、今後ともよろしく願いをしたいと思えます。

○議長（小林信） 2番、伊藤敏夫君。

○2番（伊藤敏夫） 確かに、村長が今お話されたように各集落からもいろんな声を聞いておりますけれども、小沢田の場合もそうなんです、もう2年ぐらい前に、小沢田営農組合ときみ部会の方でも、ネット張りも手伝っていただきました。そういう体験もしていただきました。それから収穫もしていただきました。それから先般、七夕の日には若勢団と一緒に灯籠書きもやっていただいて、大きな絵を描いて、そしてその脇には武蔵野大学と、宣伝の文句をされるような、そういう灯籠のでかいのを作りまして、やっておりました。

前の新聞にもあったのですが、大海との交流も非常に大々的に感激されて帰ったというようなこともあったようでございますが、そう意味で、学生の皆さんからと宿泊された皆さんが、手紙をやり取りしながらもやられたということでもございまして、いろんな面での心の交流というものも進んでいるのだというふうにも実感している一人でございます。

それから、若者が、大学生が何人か公民館に集まりまして、集落の皆さんと交流するわけですが、最後に一杯飲みますが、学生ですから、アルコールの入ったものは飲めないということでもございますが、いろんな年配の人方は、孫にモノを教えるように或いは自分の息子に、娘にモノを教えるような形で、自信満々でいろんな話をされるというようなのも、良い交流の場なのだというふうにも感じたところでございます。

それから、こういう関係でもあったのかも知れませんが、上小阿仁の出身の方が、女性であります、1名は武蔵野大学に、今年の春入学されたということで、非常にそういう意味での交流と体験させる良い意味で物事が進んでいるのだというふうに思っております、いろいろそういう意味でも、村の助成もあるようでございますけれども、心の交流が何よりも一番大事だと思いますので、ぜひ、これについては、内容をもう少し村の方でも協力できるような、或いは村民がもっと協力できるような体制づくりもお願いすることはお願いして進めていただきたいと思いますものだというふうに思っておりますので、ぜひ、これについては、いろんな角度で協力していただき、お互いに協力していければというふうに思っておりますので、村の方でも、ぜひ一つ、そういう点を考え合わせながら、前へ前へと進めていただきたいと思いますものと思っておりますので、よろしく願い申し上げたいと思えます。

以上で、私の質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。